

ルクソール西岸・マルカタ王宮内の「アマルナ型住宅 A」に関する考察

古代エジプト・アマルナ型住宅に関する建築学的考察 2

"THE AMARNA-TYPE HOUSE A" IN THE MALQATA PALACE
AT THE WESTERN BANK OF LUXOR

Architectural studies on the Amarna-type house in ancient Egypt 2

遠藤 孝治*

Takaharu ENDO

Three independent houses preserved at the Malqata Palace have overall similarities with the standard Amarna-type houses, nevertheless they present some architectural differences related to the official building characters, and the simpler details possibly show the tentative phases before the completion of this house-type. A careful study of the remaining brick pavement of the central hall in "Malqata-House A" concluded that a large stone dais for the master had been placed on the rear wall and that the roof of this hall had been supported by two columns resting on the edges of a stone dais, or more appropriately that it had been spanned by one single wood beam without any columns.

Keywords: Ancient Egypt, New Kingdom, Amarna-type House, Malqata Palace, Thebes
古代エジプト、新王国時代、アマルナ型住宅、マルカタ王宮、テーベ

1. はじめに

古代エジプトの都市遺跡の大部分は、現在の住宅地または農耕地の下に埋もれたままであり、ことさら住宅は石造建築に比べて耐久性の低い日乾煉瓦で主に造られたために残存状態が悪く、それ故にこの文明の住宅建築について、これまで十全な研究がなされずにいるということはすでに拙稿¹で述べた通りである。拙稿では、こうした状況の中で最も多数の住宅遺構が残るアクエンアテン王（紀元前約1352～1336年頃）が築いた都市アマルナのいわゆる「アマルナ型住宅」に焦点を当て、未だ不明なこの住宅形式の成立過程²を探る上で、同住宅形式に類似した例として指摘されてきた他地域のいくつかの住宅遺構や、墳墓や神殿の壁面に描かれた絵画資料としての住宅の既往解釈について再検討を試み、ルクソール西岸に位置するアメンヘテプ3世のマルカタ王宮内に建てられた3軒の住宅が、古代エジプト新王国時代の高官のための有名な住宅形式である「アマルナ型住宅」の初例として現在知られる唯一確かな遺構であることを明らかにした。

マルカタ王宮については、早稲田大学エジプト学研究所が1985年から再調査（元調査隊長：故渡辺保忠・早稲田大学理工学部教授（当時）、現調査隊長：吉村作治・同大学人間科学部教授）を開始しており、主王宮の内部から出土した多量の彩色画片の整理作業が現在継続中である³。王宮内に残存する3軒の横に並んだ独立住宅A、B、Cは、

アマルナ型住宅の平面構成の基本的原則に従って、住宅の全体平面がほぼ正方形の形状を呈し、平面を3分割して中央に住居内で最も広い部屋を配し、入口を北側に持ち、主人の私室となる寝室を南側に備えている（図1）。これらの住宅遺構のさらなる建築的特徴を把握するために、1995年12月から1996年1月におこなわれた早稲田大学調査隊のルクソール調査の際に、建築班は3軒のうちで残りが良い住宅Aの最も重要な部屋と見做される中央の広間とその手前の控えの間などの床面上に堆積した砂を除去し、床敷き煉瓦の記録をおこなった⁴。調査の結果、北側の控えの間から中央広間へと登るステップが存在することや、中央広間に柱が立てられた痕跡が全く認められないこと、また同室の南壁に接してかつて大型の石版を設置したらしき長方形の窪みが残ることなどが明らかとなった。これらの諸点は、都市アマルナに残存する通常のアマルナ型住宅と比べると特異であり、王宮内に建てられた住宅Aの建築的特徴として注目される。本稿では、マルカタ王宮内の住宅Aについて、調査結果を基に細部に見られる典型的なアマルナ型住宅との相違点を整理するとともに、この住宅の中央の主要広間について復原案を考察することとした⁵。

2. マルカタ王宮内にある「アマルナ型住宅 A」の環境復原

拙稿でも述べたようにマルカタ王宮内に残る3軒のアマルナ型住宅

* 日本学術振興会特別研究員・工修

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, M. Eng.

は、建材として用いられた日乾燥瓦にアメンヘテプ3世の王名スタンプが押されていることから、テーベからアマルナへの遷都以前に造られたことが明らかであり、同住宅形式の祖形を示すものとして重要である。都市域に建てられたアマルナ遺跡の住宅は、穀物倉庫や調理場、庭園などの付属要素を住宅の周りの敷地内に個々に保持しているが、王宮内にあるマルカタの3軒の独立住宅にはこれらは存在しない。

図2は、3軒の住宅のうち最も残存状況が良好な住宅Aの詳細平面図と断面図であり、墓土の除去が終了した部屋の床敷き煉瓦を示したものである。後述する各部屋の番号については、同じ図の右下にあ



写真1 マルカタ王宮内のアマルナ型住宅Aの現況
南西から見る (写真は早稲田大学理工学部建築史研究室所蔵)

る模式図に従う。玄関に相当する部屋1の戸口(図2-a)には床面に上るための煉瓦造のステップの一部が残存していたが、階段やスロープによって導入される玄関ポーチを備える典型的なアマルナ型住宅と比べると、これは非常に簡素な造りである。玄関ポーチを備えていない点は隣接する住宅BとCも同様である。部屋1から部屋6~7に続く戸口の位置は意図的にずらされており、古代エジプトの住宅建築において頻繁に認められるような鉤型の導入経路を成している。中央広間(部屋9)への戸口の手前には煉瓦を並べて造られた1段のステップがあり、部屋7からはおよそ10cm上るようになっていたが、これら3軒の住宅が立地するところの自然地形は北東から南西に

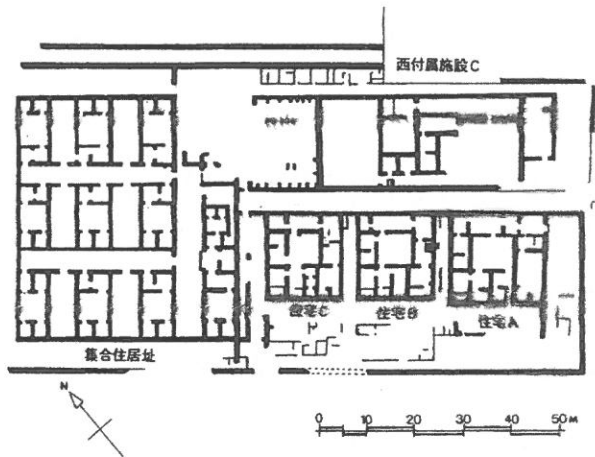


図1 マルカタ王宮西住居址 平面図

Lacovara: *The New Kingdom Royal City* (London 1997), Fig. 40を基に1部筆者改訂

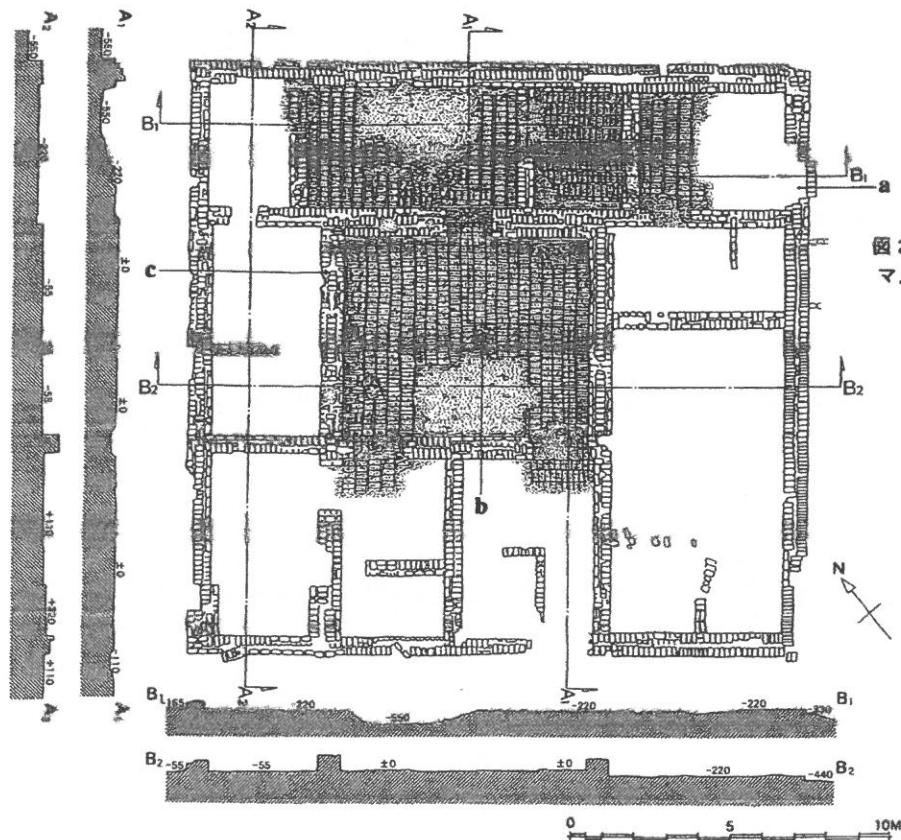
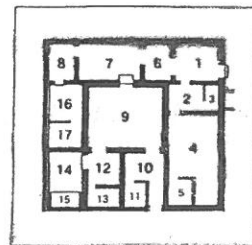


図2
マルカタ王宮内のアマルナ型住宅A
平面図および断面図



部屋番号

かけてゆるやかに上昇しており、これに対応させつついくつかの部屋ごとに床高さを変化させる工夫がなされていた。住宅では入口から奥に入るほど私的性質の高い部屋が配されており、その秩序を床高さの調整で視覚的にも明瞭に表現しているという点は、同時代の神殿建築で奥の聖域に向かうほど床を暫時上昇させて、より一層と神聖さを高めるといふ手法と共通と考えられる。このような工夫は都市アマルナに残る住宅遺構ではなされていない。

古代エジプトの住宅建築の場合、一般に柱は木で造られて石製の基礎の上に設置された。柱礎石は床煉瓦を敷き並べる前に据えられたので、たとえ礎石だけが再利用のために収奪されたとしても、円形の穴が床面に残存することになり、遺構ではこれを頼りにして当初の柱の位置を確認することが可能である。都市アマルナに築かれた規模の大きなアマルナ型住宅において北の控えの間や中央広間には柱が必ず立てられているが、これらとほとんど同じ規模である住宅Aの場合では、いずれの部屋においても柱礎石の痕跡が1つも見つからず、特異である。

中央広間隣壁の手前では、煉瓦が敷かれていない浅い長方形の窪みが観察され、またこの窪みの縁辺部では石灰質のモルタルが残存していた。長方形の窪み自体の大きさは約3.5 x 2.1mであり、中央広間内でかなり大きな面積を占める(写真2)。痕跡を総合すると、かつてこの位置に石版が貼られており、再利用のために全て収奪されたという可能性が指摘される。この解釈は、周辺の床面においておそらく石版を剥がそうとしたときに用いたと思われる工具の擦痕が認められたことから補強される。同じく中央広間のほぼ中央では直径約17cm、深さ約14cmの小さな円形の穴が見つかった(図2-b、図3)。この穴は通常約60cmから1m弱の径を有する柱礎石のための穴としては明らかに小さすぎであり、大きさと室内の位置から考えるとエジプトの住宅遺構の広間において頻繁に認められる冬または早朝に暖を取るための炉の跡である可能性が高い⁸⁾。

中央広間の西壁北側の下(図2-c)では石灰岩製の戸口が煉瓦で完全に埋め潰されており、ある時期に改変がなされたことが窺われた。広間の東壁側にも戸口が全く存在しておらず、この結果、中央広

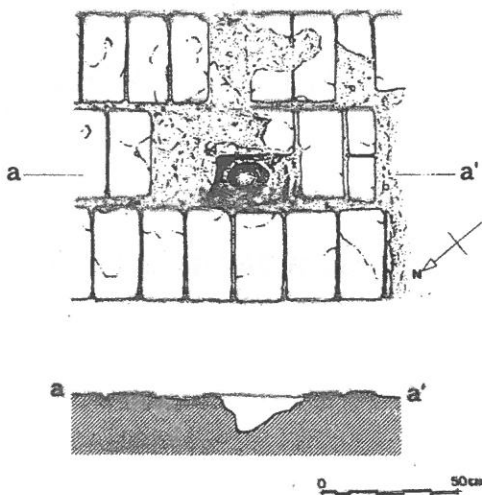


図3 マルカタ王宮住宅A 広間の床面に穿たれた小穴
平面図および断面図



写真2 マルカタ王宮住宅Aの中央広間に見られる長方形の窪み跡
南西から見る(写真は早稲田大学理工学部建築史研究室所蔵)

間からは東西にあるどちらの部屋にも行き来することができなくなっている。都市アマルナに残存する大型のアマルナ型住宅の中央広間で頻繁に見られる扉を模した壁龕装飾や、通常広間に隣接する部屋に設けられた屋上または2階への階段、住宅の後方部における家族のための小広間は、住宅Aには存在しなかった。

住宅Aを構成する壁体は、外壁と中央広間を取り囲む壁体、並びに寝室の部分において、他の箇所よりも厚く施工されている。これには住宅の骨格となる部分を構造的に強化する意図があったと推測され、特に中央広間では天井近くに窓を備えるために周囲の部屋よりも壁を高く立ち上げる必要があったという点も考慮された可能性が高い。また一方で、日乾煉瓦造の比較的厚い壁体は強烈な太陽熱に対して一種の絶縁体の役割を果たすことが指摘されており⁹⁾、室内環境を快適に保つための工夫も兼ねていたと考えられる。

3. 典型的なアマルナ型住宅との相違点

マルカタ王宮内の住宅A~Cが、住居の基本的骨格においてアマルナ都市遺跡に残存する典型的なアマルナ型住宅の平面構成と合致することはすでに拙稿で指摘した通りであるが¹⁰⁾、以上に述べた現況から窺える細部に目を向けると、以下に列挙するようないくつかの建築的な相違点も抽出される(図4参照)。

住宅A~Cに共通する相違点

- ・斜路または階段でアプローチされる玄関ポーチが存在しないこと
- ・玄関側から奥の部屋に向かって床高を上げていること
- ・穀物倉庫や調理場などの生活設備が住宅の周りにないこと

住宅Aに関して付け加えられる相違点

- ・中央広間の南側に大きな長方形の石版が備えられていたこと
- ・中央広間に扉を模した壁龕装飾がないこと
- ・中央広間から東西の諸室へと直接行き来することができないこと
- ・2階または屋上への階段が存在しないこと
- ・住宅の後方部に家族のための正方形平面の小広間がないこと
- ・各部屋に柱が用いられた跡が認められないこと

これらの相違点の多くについては、マルカタ王宮内の住宅A~C

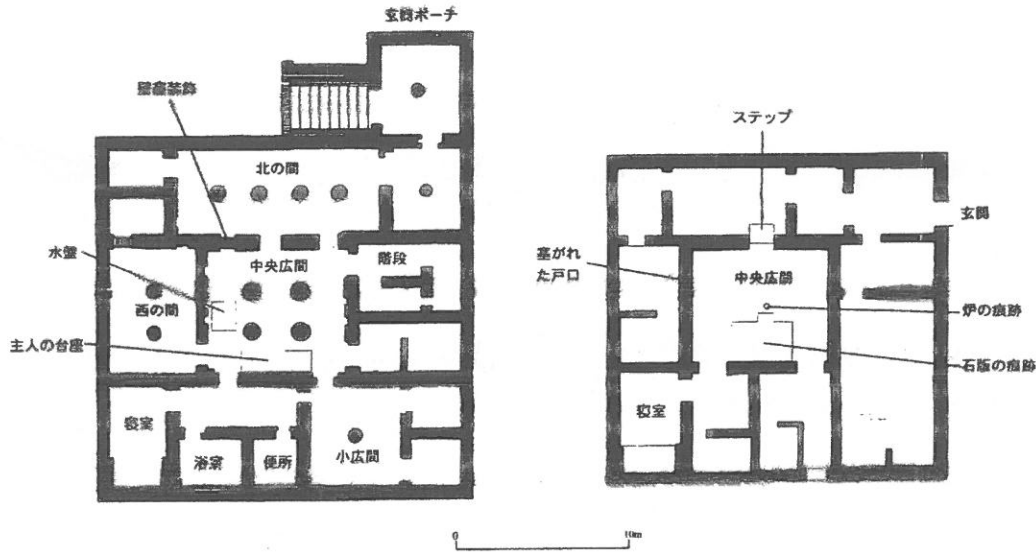


図4 アマルナ型住宅の典型例(左)とマルカタ王宮内住宅A(右)の平面比較模式図(同一縮尺)

左図は Borchardt and Ricke: *Die Wohnhäuser in Tell el-Amarna* (Berlin 1980), Plan 23: P47.19 を基に筆者作成

が、都市域に建てられたアマルナの貴族のための独立住宅の場合と異なって、王宮施設内に設けられた建物であるということに関係すると思われる。これら3軒の独立住宅が、誰のために何の目的で建てられたものであるかは具体的には明らかではないが、王宮内で3軒が整然と並び立つ様子からは公共的な性格が窺われる。都市アマルナの独立住宅では、堀に囲まれた敷地内に穀物倉庫や調理場などの生活設備が備えられ、主人とその家族、並びに使用人など数多くの人が屋敷内に定住した。彼らのための生活空間や寝室が必要不可欠であったため、マルカタ王宮内の住宅A～Cの場合とは異なって、住宅の後方に家族のための私的な小広間が配備され、2階または屋上も居住空間として広く利用された¹²と考えることが可能である。また例えば、都市アマルナの大アテン神殿の近傍に、神殿に仕えるパアネヘシイという神官のための公邸があり(図5)、この遺構の場合も中央に大きめの広間を配するなどの点でアマルナ型住宅の平面構成との類似性を

示しているが、住宅Aと同様に家族のための小広間は必要でなかったため、そのような部屋を住宅の後方に備えていないと考えられる。

加えて、玄関ポーチがないことや、各部屋に柱が多用された様子が見られないこと、中央広間における装飾的要素の1つである壁龕が設けられていないことなど、マルカタ王宮の住宅Aは典型的なアマルナ型住宅と比べて全般的に欠如している要素が多いということも指摘される。これら諸要素の欠如については、全て建物の用途に起因するだけでなく、次代の都市アマルナで1つの住宅形式として完成される直前のいくぶんか飾り気の少ない初期的な姿を示しているとも可能であろう。

一方、住宅Aにおいて、中央広間に柱の痕跡が見当たらず、入口側から向かって正面に異様な大きさの石版が備えられていたことは、都市アマルナに残る典型的なアマルナ型住宅と比べて特異な点として最も注目される。古代エジプトの住宅において室内に置かれる石製品は、手洗いや清めのための水盤が最初に思い起こされるが、住宅Aの場合、石版が存在したと考えられる長方形の窪みの大きさが約3.5m x 2.1mもあり、水盤の通例と比べるとあまりにも大きいため別の解釈が求められる。また、住宅Aの中央広間のスパンは最長でも約6.3mあり、同規模の典型的なアマルナ型住宅の場合では中央広間に必ず2本か4本の柱が立てられている¹³にもかかわらず、広間床面に柱が立てられた跡が全く見られないことは、この部屋の当初の姿を復原するに当たって問題である。住居内で最も重要な部屋と見做される中央広間の解釈は慎重を期すべきであり、これらの建築的に重要な問題については、通常の住宅遺構だけでは十分な類例が認められないので、以下においてアマルナ遺跡に残る特別な広間を有するいくつかの遺構例にも視野を広げて、詳しく考察を巡らせることとしたい。

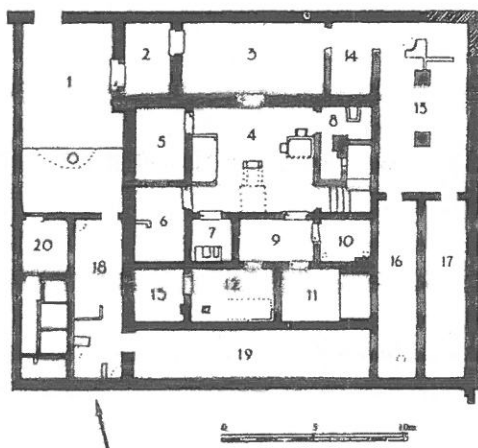


図5 神官パアネヘシイの公邸 平面図

Pendlebury: *The City of Akhenaten III* (London 1951), Pl. XI より

4. アマルナ遺跡における特徴的な広間の例

4.1. 宰相ナクトの住宅

南市街に残存する宰相ナクトの住宅は、約29 x 26mの平面規模を有し、屋内に2つの大きめの寝室を配するなど、アマルナでは最大級

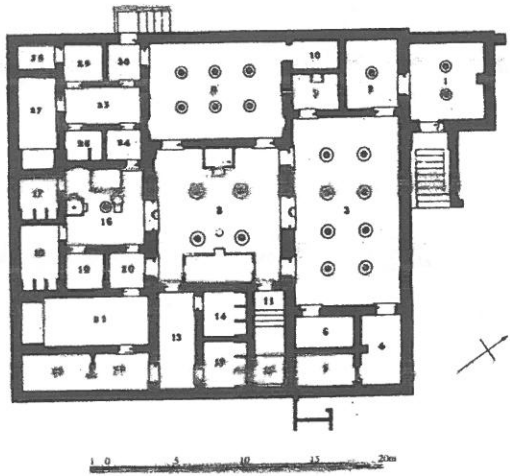


図6 宰相ナクトの住宅 平面図

Peet and Woolley: *The City of Akhenaten I* (London 1923), Pl. III より

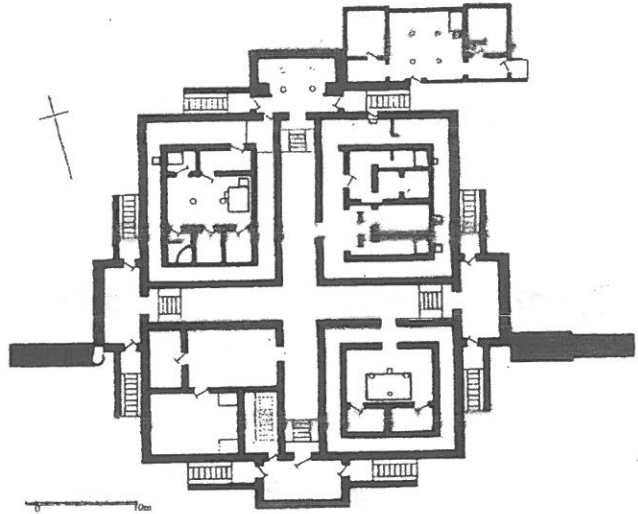
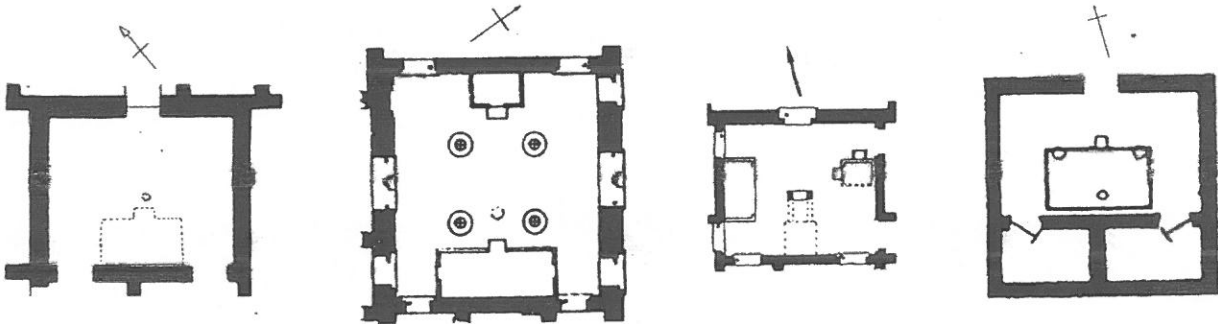


図7 外国人朝貢の間 平面図

Pendlebury: *The City of Akhenaten III* (London 1951), Pl. X より



1. マルカタ王宮の住宅A

2. 宰相ナクトの住宅

3. 神官バアネヘシの公邸

4. 外国人朝貢の間の中央広間

図8 中央広間の比較 (縮尺は全て1/300)

の住宅遺構の1つとして有名である(図6)¹⁴。約8m四方の中央広間には、2列4本の柱が立てられ、西壁側には大きさ約2×1.3mの石製の水盤。東壁側には大きさ約5.1×2.1mの主人のための煉瓦造の台座が設置されている。台座のすぐ手前には暖をとるための小さな円形の炉が備えられていた(図8.2)。

4.2. 神官バアネヘシの公邸

中央市街にある大アテン神殿の南外側に残存する神官バアネヘシの住宅は、約17×14mの平面規模を有する住宅部分とそれを取り囲む長方形の細長い倉庫群で構成される(図5)。バアネヘシは他に南市街にも大きな住宅を持っており、発掘をおこなったペンドルベリイによれば、この住宅はバアネヘシが神殿に勤続する際、数日の間、宿泊するために利用された公邸であると考えられている¹⁵。約6.5×5.5mの中央広間には、西壁側に大きさ約2.7×1.3mの台座、東壁側には約1.6×1.1mの石製の水盤が設置されている。さらに南壁側には約2.7×1.4mの範囲でモルタルの痕跡が認められ、同位置で出土した石材断片の復原から、かつては高さ約1.5mの石製の祭壇が設けられていたことが推定されている(図8.3)。広間のスパンは、マルカタ王宮の住宅Aと同様にかなり大きめであるが、柱は1本も

立てられていない。

4.3. 外国人朝貢の間

外国人朝貢の間(The Hall of Foreign Tribute)とは、大アテン神殿の北外壁にまたがって建てられた施設であり、アマルナの岩窟墓内に描かれた壁画資料を基にした考察から、第1発掘者のフランクフォートによってこの名が付けられている¹⁶。平面プランは中央に走る十字の通路によって4つの区画に分割されており(図7)、このうち南東の区画にある広間において極めて大きな水盤(約4.5×2.7m)が置かれている点に注意が惹かれる(図8.4)。広間の大きさは約8.5×5.2mであるが、ここでの水盤は部屋幅の中央に達するほどに大きく、屋根を支えるための2本の柱の基礎石が水盤の隅に載せられていた。

5. 住宅A中央広間の復原案についての考察

5.1. 中央広間の石版について

すでに述べたように、古代エジプトの住宅の室内には、必ずというわけではないが、手洗いまたは清めのための石製の水盤が備えられることが多い。都市アマルナでは、約30戸の住宅遺構において中央広間にこうした水盤が残存するが、それらの大きさを表に整理すると、

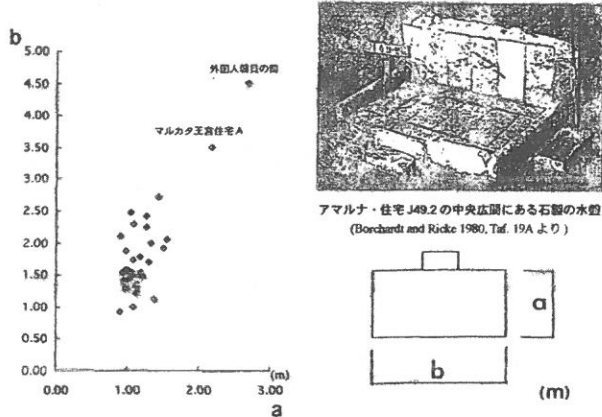


表1 中央広間に設置された水盤の大きさについて

住宅の規模にかかわらず約1.5 x 1m前後という大きさが標準的であることが分かる(表1)。従って、通常の住宅遺構ではない外国人朝貢の間の例のように特殊な場合があるものの、住宅Aに見られる長方形の窪みは水盤としては想定することが困難な大きさと言わざるを得ない。

一方、この長方形の窪みの手前に観察された円形の小穴にも目を向けるならば、ナクトの住宅の中央広間で見られるような家の主人のための台座とその手前に備えられた円形の炉との位置関係が極めて合致する点が注目される(図6、図8.1、図8.2)。住宅Aにおける問題の長方形の窪みは、マルカタ王宮南宮にある玉座(約2.9 x 2.4m)に匹敵する大きさであり(図9)、ナクトの住宅のような大きな台座(約5.1 x 2.1m)の存在も視野に入ると、台座としてならば必ずしもあり得ない大きさではないと考えられる。ここで古代エジプトの住宅建築における台座は大抵、煉瓦造であるという問題が残るが、20世紀初頭にマルカタ王宮の部分的発掘をおこなったタイトゥスは主王宮内E室の玉座が日乾煉瓦を核として砂岩を被覆する造りであったと報告しており¹⁷、また例えばマディーナト・ハーブ地区のラメセス3世記念神殿内に残存する付属王宮ではアラバスター製の台座が玉座として用いられている¹⁸。従って、住宅Aもこれらと同様に石製の台座が備えられていた可能性を十分に疑って良いであろう。逆に、たとえ石製だという理由から台座の可能性を排除したとしても、バアネヘシの公邸で見られるような祭壇や、または、異例な大きさの水盤を住宅Aに想定した場合、手前に存在する炉と思われる円形の小穴との関連についての説明が困難となってしまふ。また、水盤は必ずしも住居の中央広間に備えられたものではないため、これがないと考えても不思議なことではない。

5.2. 中央広間の天井支持構造について

次に広間の天井支持構造に関してであるが、アマルナに残存する多数のアマルナ型住宅において中央の広間が露天の中庭として利用された例は皆無であり、上で結論したように住宅Aには主人の台座や炉が備えられていたことも考慮すると、ここで中央広間に屋根が存在しなかったという可能性は極めて低い。古代エジプトの住宅研究者の1人であるアーノルドは、一般に古代エジプトの住宅建築において、

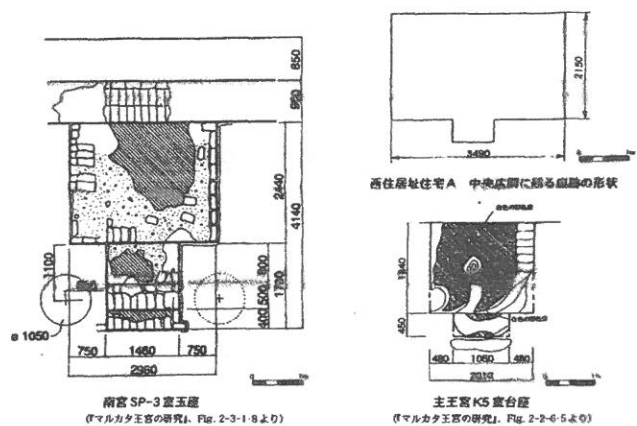


図9 マルカタ王宮内にある台座の比較(同一縮尺)

ヤシ材などの梁を架け渡した上に木の枝などを束ねて葺き、泥を塗って仕上げるといった屋根構造が採られる場合には、3.5m程のスパンが標準であったと解説しており¹⁹、部屋のスパンが約6.3mもある住宅Aの中央広間には、どこかに柱を想定する必要があるように思われるが²⁰、上述したように床敷きの煉瓦には柱礎石の跡を全く見つけることができない。状況証拠が不足しているためこの部屋に柱が存在したかどうかは不明と言わざるを得ないが、仮に柱が立てられていたとすれば、1つの可能性として、外国人朝貢の間の場合のように、南壁に接して設置された大きな石製の台座の隅に柱が立てられて屋根を支持していたと考えられ、現在はこの台座の石が全て取り去られたために柱の痕跡が見つからないと推測される。ただし、この復原案の場合、柱が広間幅の中央に配置されないという点が、他の日乾煉瓦造の住宅遺構には決して見ることでできない矛盾として残る。

もう1つの可能性は、この部屋にはもともと柱が存在しなかったという仮定である。先に述べたバアネヘシの公邸は中央広間のスパンが5m以上もあるにもかかわらず、柱を立てずに屋根をかけていたことがクラークによる復原透視図にも示されており(図10)²¹、また住宅Aと同じ新王国時代の文字史料からトメス3世王の造船所における資材の支給記録を見ると、最大で長さ30キュービット(約15.75m)

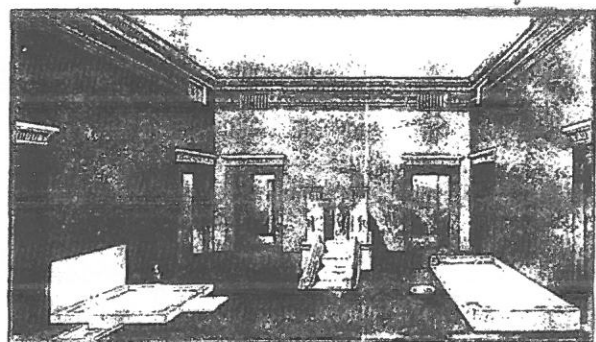


図10 神官バアネヘシの公邸：クラークによる復原図
Frankfort: "Preliminary Report on the Excavations at Tell el-'Amarna, 1926-7",
Journal of Egyptian Archaeology 13, pl. XLVII-1 より

に及ぶスギ材が輸入されたことが知られている²²。従って、こうした特別に長い木材の調達が可能で、天井材の自重をできる限り軽減すればある程度長いスパンに柱を用いずに1本の木の梁を渡して屋根をかけることができたと考えられなくない。都市域の典型的なアマルナ型住宅の場合とは異なって、2階に居住空間を持たない住宅Aならば、天井を柱で支持して頑強にする必要性が少なかったとも推測される。すなわち、広間の奥側に備えられた主人のための格別に大きな石の台座を強調して見せるために構造的な困難を伴いながらも柱を排除しようとした意欲的な試みがなされたと思ふことが可能であり、こちらの復原案の方が王宮内に築かれた建物としては魅力的で、より妥当な解釈であろうと結論される。

6. 結語

マルカタ王宮内に残る3軒のアマルナ型住宅の初例は、基本的骨格において都市アマルナに存在する典型的なアマルナ型住宅の平面構成と合致するが、現地調査の結果を基にして細部にも目を向けると、玄関ポーチや、柱、壁龕装飾など全般的に欠如している要素が多いことが分かった。とりわけ住宅Aの中央の主要広間は特異な様相を示しており、残存する痕跡についての考察から、広間の南壁に接して玉座に匹敵する大きさの石製の台座が備えられていたことを明らかにした。スパンが広いこの部屋には柱の痕跡が全く見られず、その有無は判然としないが、可能性としては2案あり、柱が存在したとすれば、台座の両端に柱礎石が載せられたと考えられ、あるいは、より妥当な案として、王宮内の施設として格別な計らいがなされたという仮定も含めれば、大きな台座を強調して見せるために意図的に柱が排除され、特別に長い木材を調達して屋根がかけ渡されたと結論した。この住宅はアマルナ型住宅の初期の姿を伝える重要な遺構であり、いまだ精査がおこなわれていない住宅B、Cについてなど、今後の調査が待たれる。

註・参考文献

1. 遠藤孝治「アマルナ型住宅の初例に関する考察：古代エジプト・アマルナ型住宅に関する建築学的考察1」、『日本建築学会計画系論文報告集』、第560号（2002年10月）、283-288頁。
2. エジプトにおける住宅形式の伝統的な流れに添うものだという見方がなされる一方で（F. Arnold: "Study of Egyptian Domestic Buildings", *Varia Aegyptiaca* 5 (1989), pp. 78-81）、新王国時代の王宮建築の様式を意図的に採り入れた独自の住宅形式であるという見解がある（P. Lacovara: *The New Kingdom Royal City* (London and New York 1997), p. 60）。アマルナ型住宅に関する研究史は、上述の拙稿の中で詳述しているので、本稿の補綴として参照されたい。
3. 1985～1988年におこなわれたマルカタ王宮での発掘調査に関しては、中川武・西本真一編『マルカタ王宮の研究』、中央公論美術出版（1993年2月）がすでに刊行されている。本稿で取り扱う王宮内のアマルナ型住宅については、同書の207-209頁において、後藤久氏（日本女子大学住居学科教授）により報告されている。この後も往時の装飾画を復原するための整理作業が継続しておこなわれており、その主な成果は、西本真一「エジプト・マルカタ王宮「王の寝室」の天井画」、『オリエンツ』、第44巻第1号（2001年9月）、76-94頁、西本真一『古代エジプト・マルカタ王宮の復原研究』、早稲田大学理工学部博士学位請求論文（2002年2月）が代表に挙げられる。
4. 現地視察の御許可を頂いた早稲田大学エジプト学研究所所長・吉村作治教授、並びに同大学文学部助教授・近藤二郎先生、また同大学理工学部建築史研究室の所蔵資料を利用して頂いた理工学部助教授・中川武先生に感謝申し上げます。現地での図面作成作業は、同大学理工学部助教授・西本真一先生の指導の下、柏木裕之氏（現・早稲田大学エジプト学研究所客員講師）、佐藤桂（旧姓：井上）氏、横山拓氏の助力を得た。また、本稿の執筆において西本真一先生には多々の貴重な御指撥を頂いた。記して感謝申し上げます。

5. 本稿は、拙稿「Amarna-type Houses at the Malkata Palace-city」, *The Journal of the Society for the Study of Egyptian Antiquities* 25 (1998) pp. 23-37の後半部分、「マルカタ王宮内のアマルナ型住宅について」、『日本西アジア考古学会第6回総会・大会要旨集』（2001年6月）、35-39頁、「マルカタ王宮内にあるアマルナ型住宅Aの中央広間に関する復元的考察：マルカタ王宮に関する研究46」、『日本建築学会大会学術講演概観集（北陸）』、F-2、631-632頁で発表した内容を基に大幅な加筆修正をおこなったものである。

6. 都市アマルナに残存する比較的小さな住宅M50.8も住宅の北側にステップだけの玄関を持つ簡素な造りであるが、マルカタ王宮内の住宅Aと同規模の住宅遺構では、必ず独立した玄関ポーチが付属される。See L. Borchardt and H. Rieke: *Die Wohnhäuser in Tell el-Amarna* (Berlin 1980), Plan 95.

7. 外部からの見通しを遮断するというだけでなく、激しい陽光と砂塵の流入を抑制する意図があったと思われる。Cf. P. T. Crocker, "Status Symbols in the Architecture of el-Amarna", *The Journal of Egyptian Archaeology* 71 (1985), pp. 37-58. 古代エジプト建築に詳しいアイグナーもまた、末期王朝時代の墳墓の考察の中で、鉤型の導入経路について言及している。Cf. D. Eigner: *Die monumentalen Grabbauten der Spätzeit in der Thebanischen Nekropole* (Wien 1984), p. 115.

8. 小さな円形の炉は、例えば本稿第4節で言及する宰相ナクトの住宅において、主人の台座の手前に見られる（図8-2参照）。

9. A. Endruweit: *Städtischer Wohnbau in Ägypten: Klimagerechte Lehmarchitektur in Amarna* (Berlin 1994), pp. 29-45.

10. 典型的なアマルナ型住宅の平面構成についての詳細は、拙稿「アマルナ型住宅の初例に関する考察：古代エジプト・アマルナ型住宅に関する建築学的考察1」、『日本建築学会計画系論文報告集』、第560号（2002年10月）、284頁を参照されたい。

11. 住宅内から出土したパピルス文書の封をするための泥の印章を基に3人の高官のための施設であったと推定されているが、詳細は明らかではない。Cf. W. C. Hayes: "Inscriptions from the Palace of Amenhotep III", *Journal of Near Eastern Studies* 10 (1951), p. 177.

12. 近年のアマルナ遺跡におけるイギリス調査隊の発掘成果からはアマルナ型住宅の2階部分が居住空間として広く多目的に利用されたことが指摘されている。Cf. B. J. Kemp: "Site Formation Processes and the Reconstruction of House P46.33", in *Amarna Reports VI* (London 1995), pp. 152-158. 典型的なアマルナ型住宅で柱が多用されている点は、こうした2階空間の充実と関係があると思われる。

13. 比較的小規模の小さな住宅では、広間の中央に1本だけ柱が立てられることもある。また、アマルナの大きき住宅のO49.1は、図面からだけでは柱が存在しないように見えるが、報告書の文中で柱の痕跡が残っていたと記述されている。Borchardt and Rieke: *op. cit.*, p. 239, Plan 74: O49.1.

14. Cf. T. E. Peet and C. L. Woolley: *The City of Akhenaten I* (London 1923), pp. 37-50, Pls. III-V.

15. J. D. S. Pendlebury: *The City of Akhenaten III*, text & plates 2 vols. (London 1951), pp. 26-27, Pls. XI-XII.

16. *Ibid.*, pp. 22-25, Pl. X.

17. Robb de P. Tytus: *A Preliminary Report on the Re-excavations of the Palace of Amenhotep III* (New York 1903, reprint, San Antonio 1994), p. 17.

18. U. Hölscher: *The Excavation of Medinet Habu III* (Chicago 1951), p. 55. また、古代エジプトの玉座に関する代表的な文献としては、K. P. Kahmann: *Der Thron im alten Ägypten: Untersuchungen zu Semantik, Ikonographie und Symbolik eines Herrschaftszeichens*. Abhandlungen des Deutschen Archäologischen Instituts Kairo, Ägyptologische Reihe 10 (Glueckstadt 1977) が挙げられる。

19. F. Arnold: "Houses", in D. B. Redford ed.: *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt* 2 (Oxford 2001), pp. 122-127.

20. 明らかどころでは、例えばマルカタ王宮内の「王の寝室」では、約4.6mのスパンに柱を全く立てずに屋根がかけられていた。中川武・西本真一編『マルカタ王宮の研究』、148頁参照。

21. 後に刊行された調査報告書の中でペンドルベリイは、この復原図における天井際のコニス装飾が存在せず、ピンク色に塗られた梁が天井に架け渡されていたと訂正をしている。Cf. Pendlebury: *op. cit.*, p. 26.

22. S. R. K. Glanville: "Records of the Time of Tutmosis III: Papyrus British Museum 10056", *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* Bd.66 (1930), Part I, pp. 105-121; Bd.68 (1932), Part II, pp. 7-41.

(2003年6月10日原稿受理、2003年11月7日採用決定)